私がみた坂の上の雲？

心臓血管外科　部長　中尾達也

新心会の皆様、新年明けましておめでとうございます。心臓血管外科部長の中尾達也です。広島から千葉に来て今年で3回目のお正月を迎えました。

さて、一昨年は大河ドラマ「平清盛」で舞台になる宮島（写真①）の初詣に関して、昨年は千葉県出身で南極観測隊隊長を過去8回歴任されている尊敬すべき知人とのおもしろき御縁を紹介させていただきました。さて今回は、昨年12月28日に生誕50年を迎えました自分にとって、多くの事を考えさせられる出来事がありましたので紹介させていただきます。

昨年の年末に広島の実家に一人で住んでいる母に、忙しい最中都合をつけて会いに行きました。私事ですが、私の両親は小学生の時に被爆しており、父親は私がオーストラリアで修行中に62歳の若さで亡くなりました。昨年は母の身の周りにいろんな災い？が降りかかりました（当の本人はそう思ってはいませんが）。私のところにカード会社から30万円の洗濯機の請求書や、リフォーム会社から40万円の請求書が突然送られてきました。一人暮らしの老人目当ての詐欺にあっているのではないかと心配して、電話で母に問い合わせると、必要なもの、ことだからと勝手に契約を済ませておりました。そのことをたしなめると、米寿の祝いに母が大好きだった大おばあさんが夢に出てきて「達也に洗濯機を買ってもらえ」と、父が夢に出てきて「家を達也に直してもらえ」と、母に笑いながら申したそうです。これは墓に行って大おばあさんと父に確かめなければならないと思い立ち急遽帰広したわけです。脚が丈夫な時の母は、週3回、海宝寺というお寺さんに父と大おばあさんの墓参りに乳母車を押して行くのが日課でしたが、実は最近体調が悪く墓に参れなくて墓の事を随分気にかけておりました。手をつないでテクテクと一緒にお寺さんに行くも、墓までの階段を昇って行くのが一歩一歩這い上がるようでした。母の老いをひどく感じましたが、寒風のもと墓前で父に語りかけるようにお経を10分近く暗唱した姿は、父が亡くなった後、何万回とも毎日お経をあげてきた母の想いを感じ、不肖な息子は感激しました。都合よく大おばあさんや父が母の夢の中に出てきて彼女に語りかけたのは実際本当かもしれないと思いを新たにしました。相手が亡くなっていても、その人をいつまでも敬い大切に思う気持ちを持ち続けることは、時空を超えてその思いの分だけ自分に答えかけてくるのかもしれません。

写真①　宮島の回廊より朱色の大鳥居を眺む。左端は能舞台

さて、昨年の3月11日に東日本大震災があり、その日私は外来をする予定でありましたが急遽韓国での研究会に出席のため午前中に羽田空港を飛び立ち、凶報を韓国のテレビで知った次第でした。遡ること震災の一ヶ月前に広島で、『被爆セーラー服のなみだ　命かがやいて』（東信堂）という本の出版記念パーティー（写真②）に招かれました。本のモデルになった女性河内光子さんは、被爆直後の本人の写真でアメリカの雑誌「ライフ」に取り上げられた方です（昨年8月6日の原爆の日に、報道ステーションで彼女の特別番組が放送されました）が、後年被爆2世である私が心臓バイパス手術をさせていただき、今回の本の出版に関しては、相談を受けていたご縁で参加させていただきました。東日本大震災でも原爆が投下された広島でも、幼児からお年寄りまでのあまりに多くの人々が一瞬のうちにその命を絶たれてしまいました。震災とそれに続く津波の翌日に新聞の一面に載った福島の写真と、この本に載っているあの忌まわしい原爆を落とされた直後に写された広島の街並みの写真はひどく似通っていました。さらに放射能被害に関しては、私が本邦でも珍しい心臓手術をさせていただいた義母も、幼少期に被爆しており、いまだに心臓病になったのは放射線セシウムの影響だと言われていたのを思い出します（福島第1原発から出た放射線セシウム濃度は被爆直後の広島の10倍近くもあり、セシウムは幼少児の甲状腺よりも心臓の方に蓄積し易いと言われている）。心臓を専門とする医師としては非常に危惧しています。それから、昨年11月に福島の会津で行われた心臓病研究会で東北（宮城県仙台市や福島県）の先生方と今回の震災に関してお話をする機会があり、是非この本を読んでいただきたくお送りしたところ、いろんな想いをお手紙やメールで返していただきました。東の人にとって遠い存在であった原爆と、西の人にとって遠い出来事である震災が、時空を超えて重なり合うようですと。こういった時期に、このような本が出版されたことは、意義深いものだと考えます。

写真②　左から河内光子さん、中尾先生、著者 大西和子さん、日本被団災代表 坪井直さん

今回の震災後、毎日、新聞に東北3県で亡くなられたり、行方不明になって発見された方々の名前が掲載されていました。私は毎日、その新聞で宮城県の欄に目を通していました。私が15年前シドニーの病院にいる時に心臓手術をさせていただいた気仙沼の遠洋漁業の漁師であった菅野さんは思い出深い患者さんのお一人です。船上での抜歯が原因で感染性心内膜炎になり、大動脈弁がぼろぼろに破壊され、しかも大きな脳梗塞になった状態で病院に搬送され、緊急の心臓手術を施行致しました。すぐに渡豪された御家族（菅野さんの娘さんはその後、地元警察学校を卒業し、宮城県警鑑識課に勤務されていました）も含めた献身的な2ヶ月のリハビリ看護（毎日病室には演歌が流れていましたが）後に、無事帰国を果たされ東北大学に搬送されました。3年後、私が仙台を所用で訪れた際にお会いしましたが、見違える程元気な姿になられていました。ある日、宮城県の行方不明者欄に「カンノ　○○○○」というカタカナで住所不詳の同姓同名を目にし、心が震えました。いろいろ考えた末に、思い切って宮城県警の娘さんにお電話をしたところ、「あれは同姓同名なんですよ！私達は高台に家があってなんとか助かりました」と返事をいただき安堵いたしました。「よかったですね」と言いながらも、世の中というもの（病院内外を含めて）は、生かされる者と、突然訪れる死を享受しなければならない者が隣り合わせで路上に立つことが往々にしてあることをこの震災で深く痛感させられました。

医学それに携わる医療人には、Science（サイエンス）（科学）、Art（アート）（技術）、Humanity（ヒューマニティー）（人間性）の3つの要素が、毛利元就の3本の矢の如く必要とされています。

人として生まれ50年、医者になって25年、心臓外科医を目指して20年、若い時からいろいろな坂をがむしゃらに登ってきて、3つの要素の山の頂が少し見えてきたのでしょうか。司馬遼太郎がいう〝坂の上の雲〟とは、目の前に高い理想という登るべき坂があり、その坂を登ったところには輝かしく白雲が日に照らされていたという意味でしょうか。一方、私が登る坂は医療人としての3つの坂でありました。しかし、50歳になり登ってきた坂の上には輝かしい雲海などなく、いまだ新たな坂が雲に続き、時には自分を見失い、坂を登る以外の道に迷い込むことがあります。人として、医療人として、心臓外科医として、私の母、他の分野の方々、多くの患者さんからなんと学ぶことが多いことかと。今まで坂を登る途中での思いがけない出会い、ご縁は想像を超えた新しい境地を拓いてくれ、経験則では解決できない課題をも多くもたらしてくれました。感謝！感謝！です。

これからは、山の頂の霧に迷うことなく、さらに登るべき雲海に続く坂を、父の墓に向かうお寺の坂の階段を這い上がるように登っていった母のように、一歩ずつゆっくり足を進めて登り、いつしか時世を越えた雲海人といろんな話が出来るように生きていきたいです。

本年も宜しくお願いいたします。